

震災から3年

額田 春美

神戸大学医学部附属病院周産母子センター

今だから話せる

私は周産期センターに勤務していますが、ここ5年間はずっとベビー室で働いています。先日、授乳中のお母さんと、3年たって初めて震災の時の話をしました。実は今まで患者さんに「震災当日に私がどうしていたか」というような話をしたことはなかったんです。以前にも震災の記録を残すから文章を書いて提出して下さい、という話がありました。その時は一応書いてはみたものの、なぜか“できれば何も書きたくない、言いたくない、何を言ったらいいかわからない”という気持ち強く、自分の心の内側に触れることができませんでした。けれどお母さんと何気なく話し始めたことで、やっと私も気持ちを整理できてきたのだらうかと感じ、今回、あえてあの時のことを書いてみたいと思い筆をとりました。

あの時

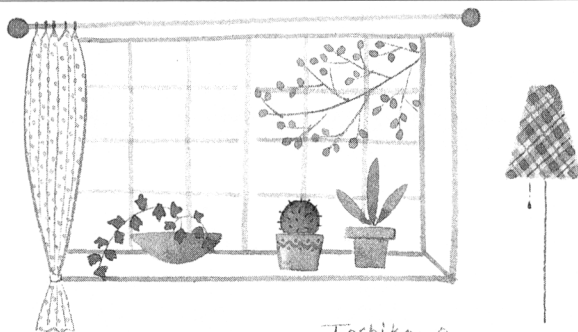
地震の時、あの激しい揺れの後、ラジオのアンテナのひきつった声を聴きながら懐中電灯の灯りを頼りに着替えをして、マンションのバルコニーの外がバラ色になっているのに気がついたのは、まだ夜が明けるはずのない時間でした。その方向はちょうど私の実家のある、長田区。きっと空襲ってこんなだったんだらうな、と現実離れしてぼんやりと思ったことを覚えています。悲しいともなんとも思えませんでした。涙も出ませんでした。「もう今から家にむかってもダメだろう、絶対に間に合わない。自分はこれからどうするべ

きか。とにかく、病院へ行こう。勤務者ではないけれど、私は看護婦だから、病院へ行かなければ」。淡々とそう答えを導き出した時に、私は父と大晦日に話をした時のことを思い出しました。

実は私、看護婦になることを父からすごく反対されていたんです。すごく、という用語弊があるかもしれませんが。しかし常日頃、何も言わない父が正面から反対を唱えたので、私にとっては強烈な印象でした。「ひとつ間違えば自分のミスが人の命にかかわってしまう、そんな大変な仕事を、なぜ、わざわざ選ばないといけないのか」。高校卒業後、看護婦になりたいと言った私に、父はそう言ったのです。それでも結局、自分のやりたいことを押し通して看護婦になり、助産婦になった私でした。ちょうど大晦日に実家に帰った時、たまたまその時のことが話題になり、私は父に「あの時お父さんが言ったこと、ほんまやなと思う。年々、その重さが実感になってくる」と話しました。父は一瞬驚いたように私を見た後「そうか」と言ってうなづいていました。その父の横顔を思い出したとき、私が家へ帰らず病院へ行くことを、父は理解してくれると思いました。

病院―震災当日の1日

地震直後の病院は静かでした。「アレスト!」と一言叫び、点滴を手に患者を運んできた車へと走り込む医師、廊下へ呆然と並ぶ人たち。でも誰もが無言で、まるで無声映画のようでした。とにかく自分の病棟へ行かなければ、と申し訳なく思いながらその前を通り過ぎて階段を登りました。



Toshiko. 6

ベビー室の入口は倒れたロッカーで塞がっていたため、別のドアから入りました。GCUフロアでは、水道に取り付けた機械が振動でもぎ取られ、水が噴き出して池になり、まだ流れ続けていました。ベビーの安全を確認して水を始末した後、さてミルクの確保はどうしようということになりました。調乳設備のある旧病棟の1階は壁が崩れ、使用できる状態ではありません。ミルク缶をもらって急遽ベビー室で作ることになりました。そうこうしているうちに、「タンスが頭に落ちたという幼児が来ます」と連絡が。普通なら入室許可はできません。しかし、一刻を争い、しかも呼吸器管理に対応できるのはベビー室だけなのです。誰もが黙々と、処置の準備を行ないました。しかし人工換気を開始し、エコーの結果頭蓋内出血があることがわかって、検査室は減茶苦茶、レントゲンは現像できるかわからない状態。何もかもが普段とは大違いでした。

処置が一段落したところで、はっと気がつくともラジオから安否情報が流れていました。きっと入院中の児のご両親は心配しているにちがいない、病院への連絡手段や交通手段がないのではないかと、何とかして児の安全を知らせたいと考えてラジオ局に電話をかけました。「神戸大学病院ベビー室に入院中の赤ちゃんは全員無事です。安心して下さい」。「このラジオから流れてきたメッセージを聴いて涙が出ました」というご家族の言葉を後から聞き、電話をかけることができて本当に良かったと思いました。

「自分にできることは何か」とにかくそれだけを

考えて行動しているうちに夕方になっていました。看護部からおにぎりの差し入れがあり、気がつけばそれがこの日、初めて口にした食事でした。

生と死と

実家の家屋は全壊ながら、幸い家族は全員無事であることがわかりました。ホッとしていたところに、友人が亡くなったことを知り、頭を殴られたように思いました。私は家族が無事だったことで安心してしまい、まさか友人を失うなんて、想像もしていなかったのです。

死体安置所には、1階にも2階にも、たくさんの棺が置かれていて、その中にTちゃんの棺がありました。意地っ張りな私にとって、彼女は自分の気持ちを素直に話せる大切な友人でした。「今年も一緒に頑張ろうねと約束したのに」「なぜTちゃんが死ななければならなかったの」そう思うと、とても辛い気持ちになりました。私は今まで「人は生まれてきた限り必ず死ぬけれども、生きているときも死んでいるときも、人の生命は宝であり、大切な存在であり、その大切さには変わらない」と考えて患者さんへのケアを行ってきました。しかしTちゃんを失って、改めて命のかけがえのなさ、尊さを実感することになりました。

私は今後も彼女が教えてくれたことを忘れず、生命の輝きを何よりも大切にできる助産婦を目標に、働き続けていきたいと思っています。

次は、教務として後輩育成に力を注いでおられる、尊敬する大西先輩にバトンをお渡しします。